砂防ダム用管理道路建設に先立つ試掘調査

大栗沢遺跡

2009

長野県辰野町教育委員会

序

大栗沢遺跡は標高1,000mの高地に所在する遺跡です。この遺跡を含め、小野地区において今まで調査事例はありませんでした。今回試掘調査を実施し、狭い範囲ながらも縄文時代早期の住居址が出土し、非常に大きな成果をあげることができました。

この遺跡は牛首峠を越えると木曽谷に抜けることができ、東に向かえば諏訪盆地、北に向かえば塩尻市に通じる古い道筋の途中に存在します。縄文人もこの道を利用して、上松町のお宮の森遺跡や、岡谷市の樋沢遺跡、塩尻市の向陽台遺跡の住人等と交流していたのかもしれません。

今回の調査成果を、縄文時代早期研究の資料として活用していただくことをお願い申し上げます。

末筆になりましたが、発掘調査に従事していただいたみなさんにお礼を申し上げます。

辰野町教育委員会
教育長　古村　仁士

例　言

1．この報告書は、砂防ダム用管理道路建設に先立って実施した長野県上伊那郡辰野町大字小野4217番地他に所在する大栗沢遺跡の試掘調査報告書である。
2．試掘調査は、辰野町長矢ヶ崎克彦と、伊那建設事務所小池厚の委託契約に基づき、実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3．発掘調査は平成21年12月７日から平成21年12月８日まで現場の作業を行い、平成22年３月23日までの間、遺物の整理および報告書の作成を実施した。
4．発掘現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は板倉裕子、大森淑子、早川裕美子が行い、遺物の台帳作成・接合は村上茂子が行った。また、実測図及びトレースの作成は板倉裕子、大森淑子、佐藤直子、竹内みどりが行った。
5．調査時及び、整理時に作成した実測図及び写真は、辰野町教育委員会で保管している。

発掘調査関係者名簿

調査主体者	古村　仁士（辰野町教育委員会教育長）
事務局	林　一昭（辰野町教育委員会教育次長）
	矢島　岡衛（辰野町教育委員会教育次長補佐）
	小沢　靖一（辰野町教育委員会文化係長）
	福島　永（辰野町教育委員会文化係）発掘調査担当者
発掘調査協力者	板倉　裕子、大森　淑子、高木　四郎、早川裕美子、宮原　栄治
整理作業協力者	赤羽　弘江、板倉　裕子、大森　淑子、佐藤　直子、竹内みどり、早川裕美子
	村上　茂子

目　　次

序
例　　言

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境…… 1
　1．位置と付近の地形・地質…… 1
　2．歴史的環境…… 5
第Ⅱ章　調査の経緯と経過…… 5
　1．保護協議の経過…… 5
第Ⅲ章　発掘調査…… 7
　1．調査の方法…… 7
第Ⅳ章　遺構と遺物…… 7
第Ⅴ章　ま　と　め…… 11

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　調査地点周辺地形図…… 3
第３図　試掘調査位置図…… 6
第４図　第１号・第２号トレンチ実測図…… 8
第５図　第３号トレンチ実測図…… 9
第６図　第１号住居址出土遺物(1) …… 10
第７図　第１号住居址出土遺物(2) …… 11

写真図版目次

図版１　調査前風景
図版２　掘削状況／調査状況／調査地区全景
図版３　第１号トレンチ／第２号トレンチ
図版４　第３号トレンチ／第１号住居址
図版５　第１号住居址出土遺物

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

１．位置と付近の地形・地質

⑴　地　　形

辰野町は、南北約70㎞の伊那谷の北端部、長野県のほぼ中央部に位置する。また、西を木曽山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の６つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延び、北部には霧訪山（1,305.4m）を中心とする標高900～1,300mの霧訪山山塊が存在する。この山塊は、日本海側と太平洋側との分水嶺であり、辰野町のほとんどの水系が太平洋側水系に属しているが、小野区飯沼の牛首峠（1,072m）より西部の一部は千曲川水系であり、日本海へと注ぎ込んでいる。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川と大城山南山麓でＹ字形に合流する横川川は、上流に多くの支流を持ち、Ｖ字谷や、沖積地の谷底平野を形成している。

小野盆地は横川川の支流のひとつである小野川の上流部に位置し、山麓と平坦部との境に存在する、北東から南西に走る霧訪山断層と、西の牛首峠付近から東の小野峠付近にかけて飯沼川沿いに東西に走る断層の活動によって陥没した「断層角窪地」である。また盆地西部には複合扇状地が形成されている。この扇状地の扇端部は小野川によって浸食されて段丘化しており、末端部には湧水がわき出ている。

また、盆地から流れ出す河川はすべて小野川の支流であり、東側からは、小野川の源流となる竹の入川をはじめ、楡沢川などが西流し、西山からは駒沢川や、牛首峠を源流とする飯沼川が注ぎ込んでいる。

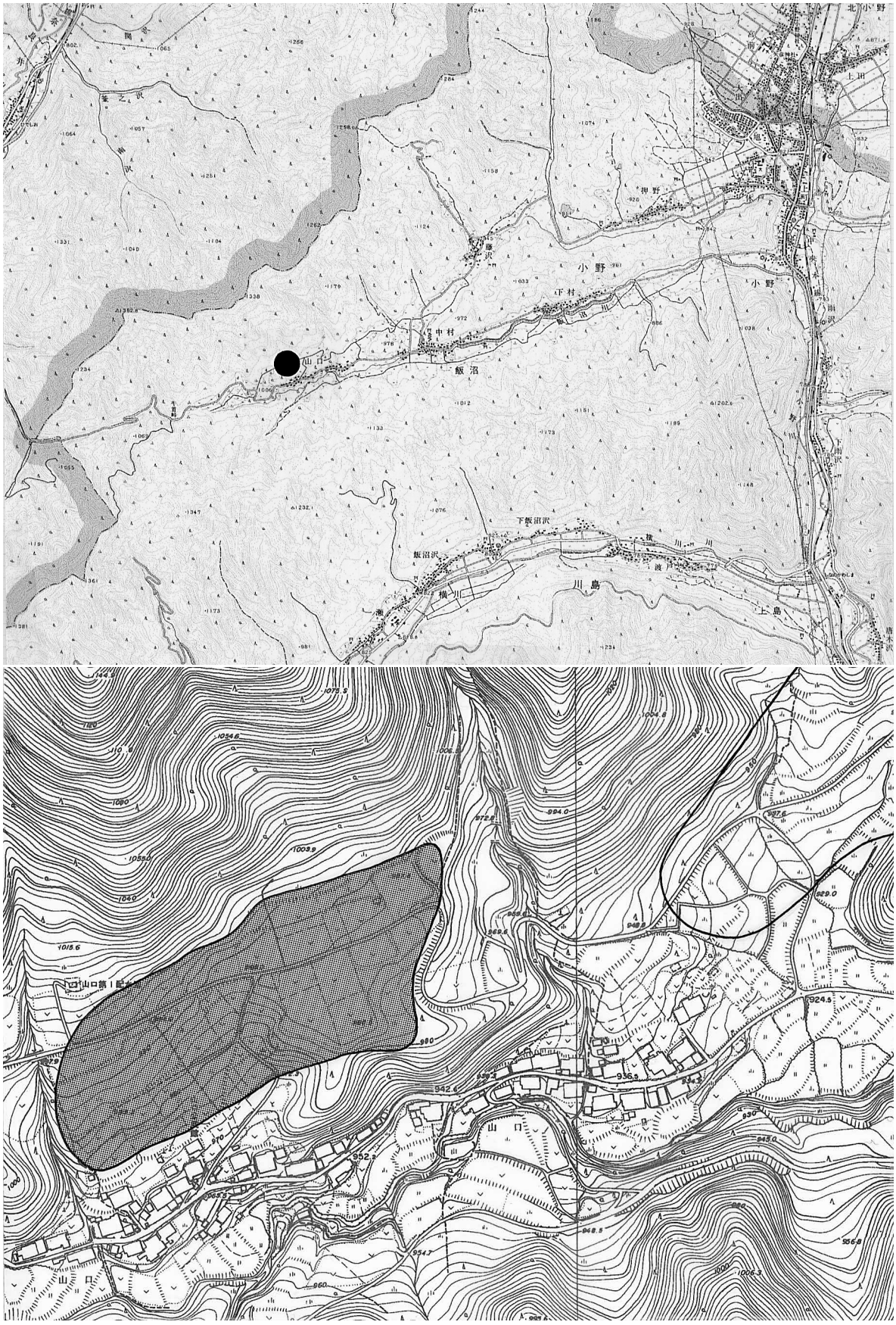
⑵　地　　質

長野県はその中央部に日本を代表する大断層である糸魚川－静岡構造線がはしり、その東側にフォッサマグナが広がっている。また、南部には中央構造線が東西に縦走し、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯の東端部にあたる。このため、赤石山脈は辰野町南部で途切れ、木曽山脈の花崗岩についても辰野付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁辺部で形成された堆積岩を基層とし、東部地域ではその上部に沢底層と呼ばれる領家帯がのり、その後に赤羽層や、塩嶺累層といった砂礫層や火山泥流堆積物が堆積している。さらに、それを諏訪湖ができる以前に諏訪地方の山々から流入してきた、平出層といわれる礫層が覆っている。

小野盆地は、西部の山地は奈良井層と呼ばれる中生代の地層であり、東部の山地では鮮新世から更新世にかけて堆積した火山噴出物である塩嶺累層が奈良井層を不整合に覆い、その上位にテフラをのせていることが多い。また平地は更新世後期末には霧訪山山塊の上昇に伴って浅い湖沼または湿地状を呈し、小野泥炭層を形成していった。その後、背後の山地を削って堆積した扇状地堆積物や、はんらん原堆積物が谷底平野を覆い、今日の地質構造を構成している。

なお、前述のとおり、この地域には断層がいくつか存在し、小野川に沿って南北に走る小野川断層や、それ以東の断層によって中生代層が落ち込み、その上に新しい地層が厚く覆っていることが地質調査の結果推定できるようになった。なお、飯沼川や、横川川、小横川川は、谷あいでは北東に流れているが、途中大きく流れを南に変えている。これは、奈良井川と同様に、本来は北に向かって流れる川であったものが、断層が動いたために南流するようになったと考えられる。



第1図　遺跡位置図（上：S＝1/50,000、下：S＝1/5,000）

第２図　調査地点周辺地形図　　Ｓ＝1/1,000

２．歴史的環境

小野地区は、枕草子の63段に「里は…頼めの里」と書かれた京の都にも名をはせた地域である。

この地区に所在する鍛冶屋畑遺跡からは、縄文時代の翡翠の大珠が採集されているのをはじめ、明治２年に廃寺となった神光寺跡からは、白鳳期と考えられる布目瓦を藤森栄一が採集している。さらに、延喜式に小野牧が御牧として記載されている。

戦国時代になると武田信玄が伊那郡に侵攻した際、小笠原長時の家臣草間肥前が小西城（押野地区）に陣を張ったとも伝えられている。さらに織豊期になると、この地域で境界争いが起こり、豊臣の裁許によって唐沢川付近を境に筑摩郡と伊那郡に２分されることとなり、現在に至っている。

江戸時代に入ると小野は初期中山道の道筋となり、小野宿が整備され、今もその町並みが残っている。また、大沢川を境として以北が幕府領となり、江戸時代を通じて高遠領との２つの支配が続くことになる。

また、矢彦・小野神社には中世の諏訪上社の神使廻湛の神事にも使われていたものと同様の形態と考えられる鉄鐸（ぬさほこ五垂鈴）が伝存している。

大栗沢遺跡の存在する地区は、初期中山道の通過地点であり、戦国時代に武田氏が小野に関所を設けたといわれる牛首峠に近い場所に位置している。この付近には峠の頂上付近に縄文時代中期の土器が採集された牛首峠遺跡（遺跡番号12）や、縄文時代中期初頭と平安時代の遺物が採集された長者平遺跡（14）、石鏃の採集されている中入口遺跡（15）が周知の遺跡として存在する。しかし、指定範囲外の畑（大栗沢遺跡西部）でも黒曜石が採集されるとの地元の人の話もあり、表面採集ではなかなか把握できない縄文時代早期の遺構が検出さたことも考え合わせると、今後周知の遺跡以外でも古い時期の遺跡が発見される可能性が高い。

第Ⅱ章　調査の経緯と経過

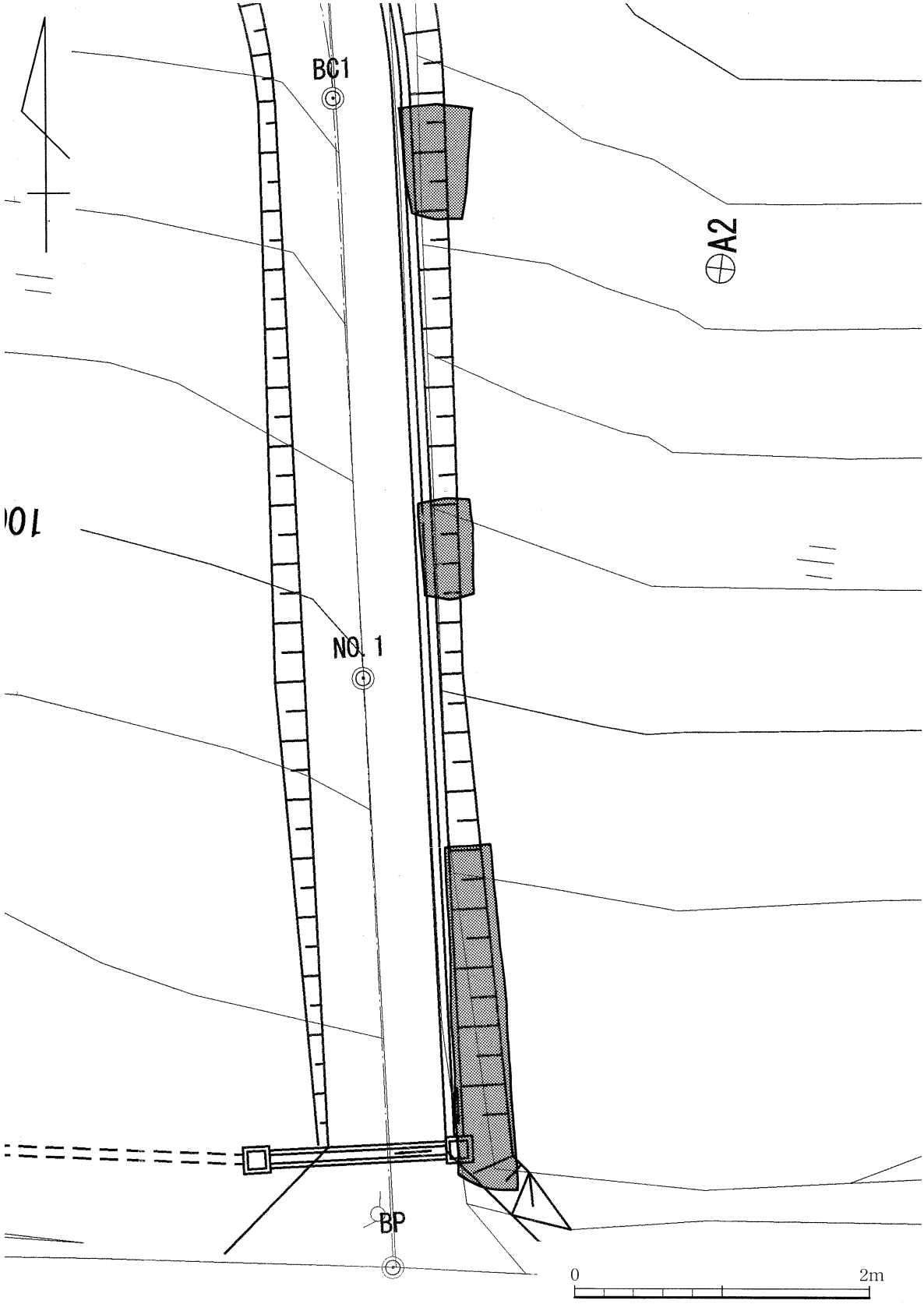
１．保護協議の経過

小野区山口地区の、のみ川の砂防ダム建設に関しては、平成18年に協議を行い、工事立会いを実施している。今回はその第２期工事で、のみ川のさらに上流部に建設する砂防ダムの管理用道路を造成する事業である。

この事業についても平成20年度の「平成21年度以降実施予定の公共事業照会」によって回答がよせられた。これをうけて平成20年５月27日に伊那建設事務所と長野県教育委員会、辰野町教育委員会の３者で保護協議を行い、その後、伊那建設事務所と、町教育委員会の２者で同年12月18日および平成21年７月15日の協議を経て事業内容の詳細が判明した。

それによると現在使用されている道路は整地するのみであり、掘削を伴わないものの、東側の一段高い耕作地は掘削が及ぶ事が判明したため、掘削を行なう地点について試掘調査を行なうこととした。その後数度の協議を伊那建設事務所と町教育委員会との間で行った後、平成21年９月30日付で文化財保護法第94条の通知書が提出された。

12月１日に、現地で業者も含めての協議を行った後、辰野町長矢ヶ崎克彦と、伊那建設事務所長小池厚との間で委託契約を締結し、試掘調査を開始した。なお、調査中に縄文時代早期の住居址の一部が検出されたため、今後の調査方法について現地で協議を再度行い、住居址の破壊が懸念される地点について遺構を掘り上げることとし、調査を実施した。



第３図　試掘調査位置図（Ｓ＝1/200）

第Ⅲ章　発掘調査

１．調査の方法

試掘調査は、あらかじめ設定した３ヶ所の表土を重機によって掘削し、その後ジョレンを使い、人力によって遺構の検出につとめた。地山面に落ち込みが検出された地点にはサブトレンチを開坑して、遺構の有無を確認した。遺構が確認された地点では移植ごてを使用して遺構内の覆土を掘り下げた。

なお、第３号トレンチから土器片が出土し、住居址が確認されたため、伊那建設事務所との協議を経てトレンチを拡張し、検出された住居址を調査することとし、現在の道の部分については慎重に工事を実施することを確認し、保存することとした。

調査中には必要に応じて遺構を半割するなどして断面図の測量につとめた。なお、第３号トレンチで検出された住居址については、当初のトレンチの北壁が遺構のほぼ中央になると推定し、壁の土層断面図を測量した。また、トレンチ東面の断面の測量によって、遺構の断面図を兼ねることとした。

遺構の掘り上がった時点で、1/20の縮尺を基本にして遺構平面図を、トータルステーションによる変化点の取り込み、打ち出しを用いての結線作業で作図した。

なお、調査区の設定は、伊那建設事務所で実施した測量委託業務で設定された任意の座標値を用い、辰野町で実施中の、地籍調査で設置された境界杭を記録することによって国家座標との整合性をはかることにした。

基準標高についても、前述の測量時に業者によって設置された仮標高地点（KBM3：994.958m）を使用した。

現場での遺物の取り上げは、トレンチごとに行い、遺構内の遺物については各遺構別に取り上げた。

また、遺物の整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には出土遺跡名（略称：OGZ）と遺物番号、遺構名等を註記した。現場での写真撮影は一眼レフカメラを２台使用し、モノクロームネガフィルムと、カラーポジフィルムを用いた。また、出土遺物の撮影にはデジタル一眼レフを使用した。

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１号住居址

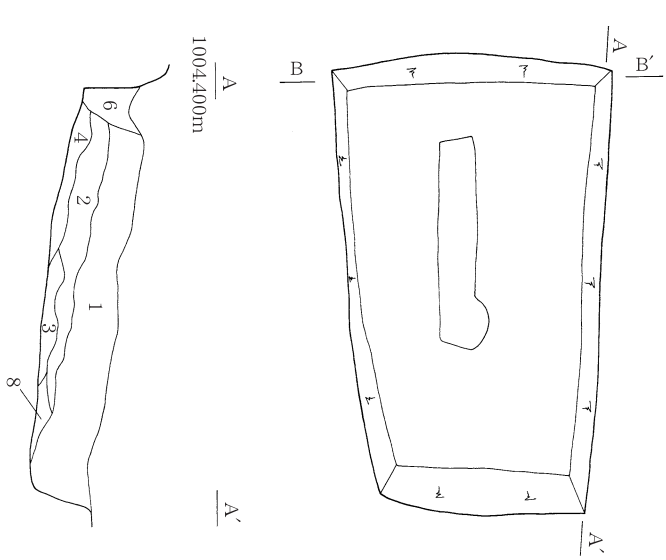
第３号トレンチを重機で開坑したところ、黒色系の土から土器片が数片出土した。このため、人力で掘り下げたところ、立ち上がりを検出できたので、住居址と判断した。この住居址は当初設定したトレンチより北部に広がっていたため、再度重機によって第３レンチを拡幅して調査を行った。なお、東部は開発区域外であり、西部は遺構に掘削がおよばないことが確認できたため、調査を行っていない。

住居址の規模は直径約３ｍの円形で深さは約50㎝であったと推定される。床面に一部段差が検出されたが、性格は不明である。ピットは住居址中央部に１ヶ所検出できたのみである。また、南部では被熱地点が確認された。なお、床面に硬化面を検出することはできなかった。

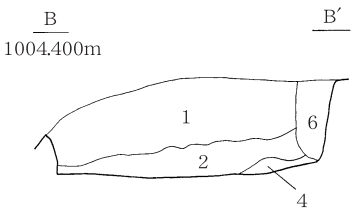
遺　　物

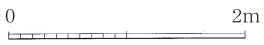
今回の調査では小片を中心に破片が出土した。多くが押型文および無文の土器片であったが、縄文時代中期初頭および後期の土器片が混入している。

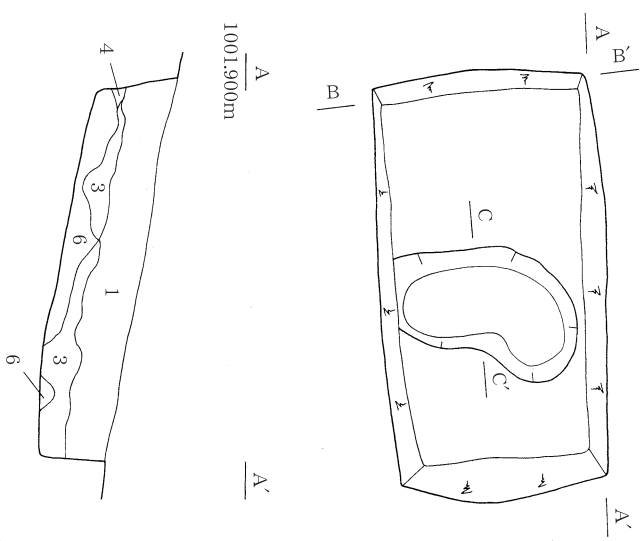
第５図１～10は楕円文である。11～16は山形文である。



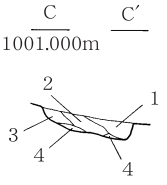
第１号トレンチ
１：暗褐色土（小石多くまじる）－表土
２：黒褐色土
３：暗褐色土（やや黄色味をおび、小石やまじる）
４：暗黄褐色土
５：暗褐色土
６：カクラン

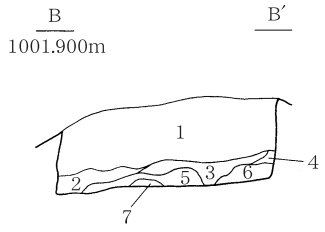


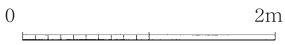




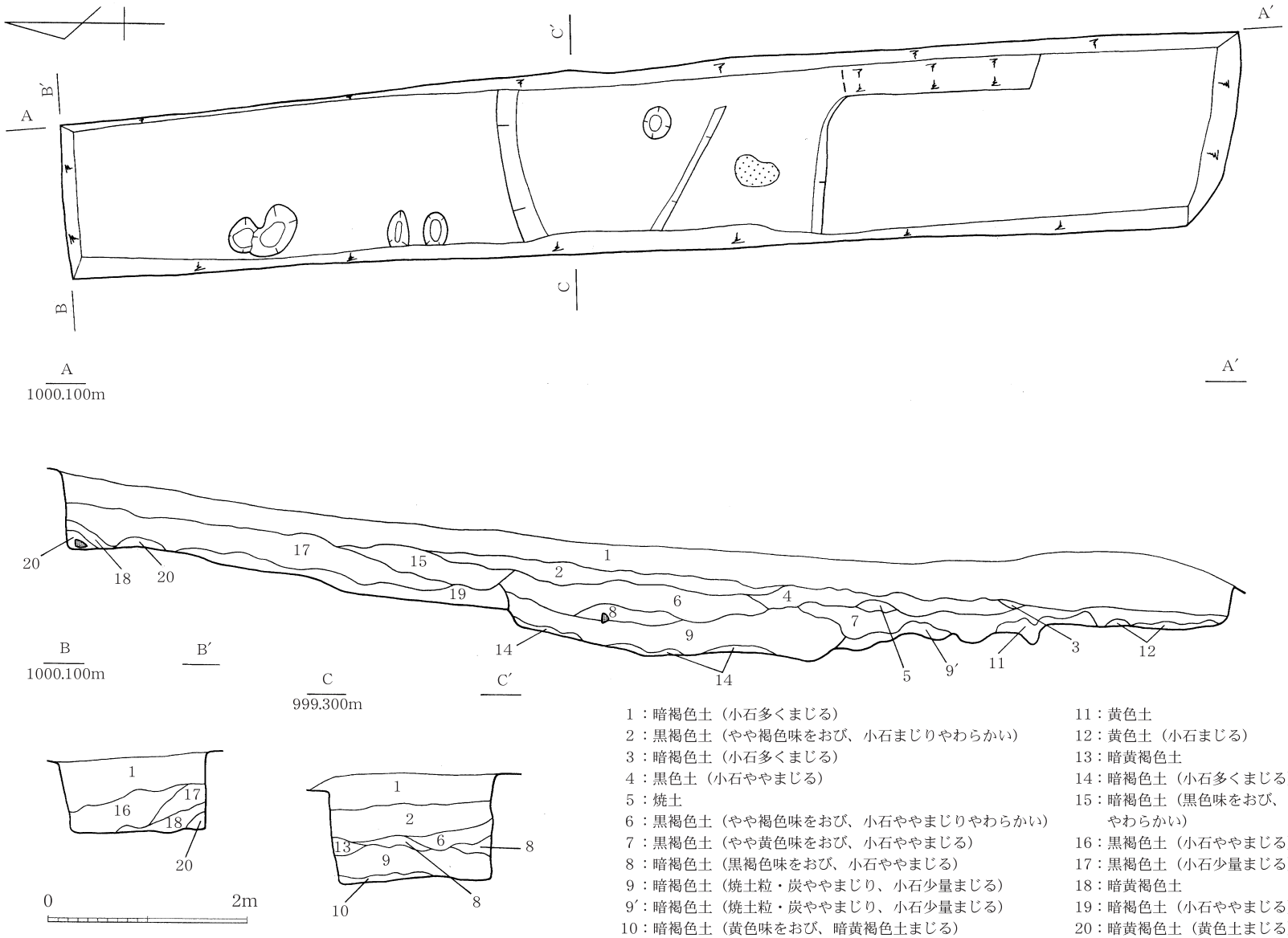
第２号トレンチ
１：暗褐色土（小石多くまじる）
２：黒褐色土
３：暗褐色土（やや黄色味をおび、小石やまじる）
４：暗黄褐色土
５：暗褐色土と暗黄色土の混合土（小石ややまじる）
６：暗黄褐色土（黄色土少量まじる）
７：黄色土（ローム）
８：黒褐色土
９：黒褐色土（小石まじる）
10：黒褐色土（黄色土まじる）



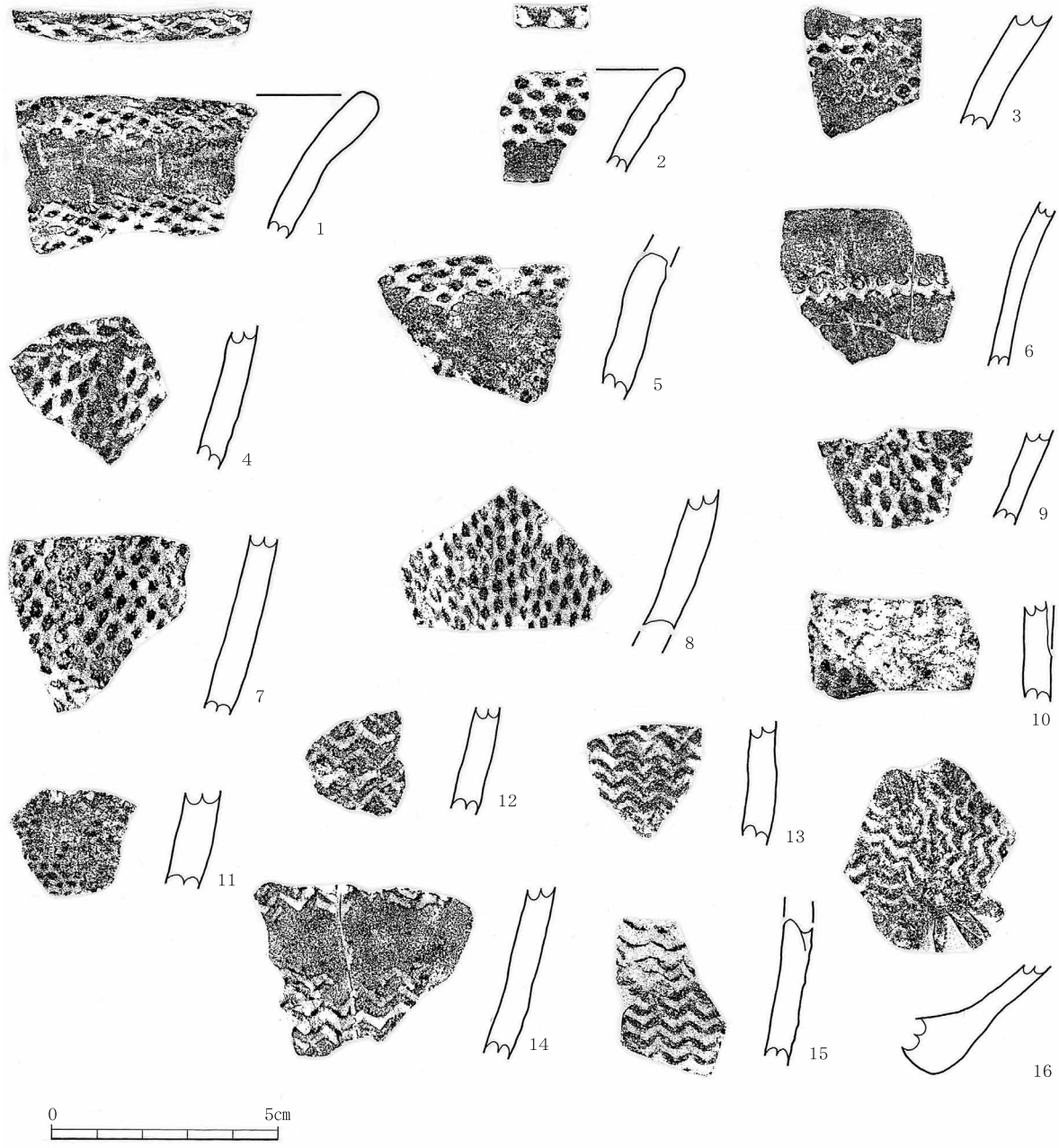




第４図　第１号・第２号トレンチ実測図



第５図　第３号トレンチ実測図



第６図　第１号住居址出土遺物(1)

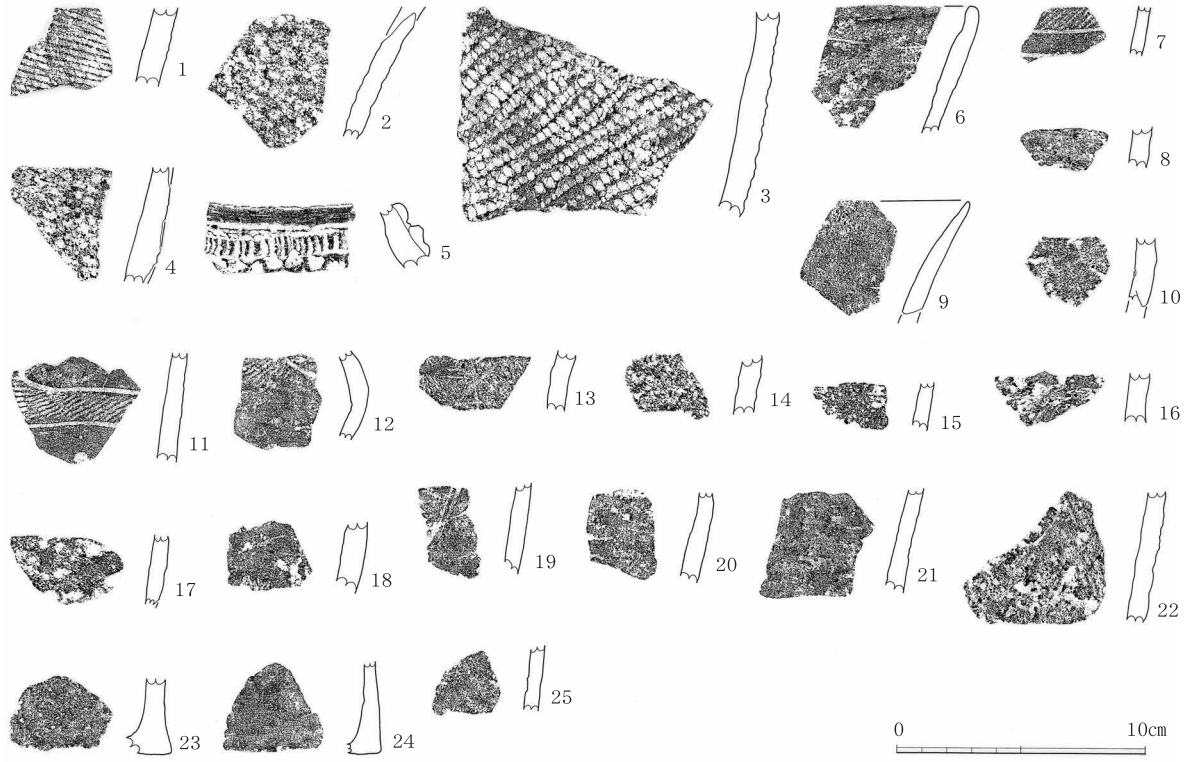
第１号土坑

第２号トレンチの中央部に黒い落ち込みがあったため、土坑と判断し調査を行った。しかし完掘した状況では不整形であることから、自然の落ち込みの可能性もある。

ピ ッ ト

第３号トレンチの拡張部分、第１号住居址北部で検出された。北部のピットは２基が重複しており、平面プランも不整形である。南部のピットは長径50㎝程度の楕円形のプランであった。

いずれのピットも深さは５㎝前後と浅かった。



第７図　第１号住居址出土遺物(2)

第Ⅴ章　ま　と　め

今回の試掘調査は包蔵地の西端で、地形的にも急であったため遺構が検出できるとは予想していなかった。結果的に縄文時代早期の住居址が出土したことは、この付近に早期の遺跡が複数存在する可能性が高まったといえる。遺物は、帯状施文の細かい楕円文と、若干少ない比率で山形文が存在する。出土遺物が小片で、しかも点数が少ないため、時期の特定は難しいかもしれない。しかし遺跡西部に牛首峠が存在し、東は三沢峠、北は善知鳥峠、南は伊那谷へと開け、松本平や諏訪盆地、伊那谷北部に所在する遺跡と、木曽谷の遺跡とを結ぶ玄関口のひとつとして、このルートを通じて物資やヒトの交流があったと考えることができる資料が出土した意義は大きいと考えたい。

また、縄文時代中期初頭と考えられる土器片や、後期の土器片が若干出土しているが、このような高地に、中期だけでなく後期の遺物も出土した。後期の遺跡が、このような高地で出土した例は町内では初めてである。早期のみならず縄文時代を通じて、そして近代に至るまで牛首峠が物資の流通のルートとしてその役割を担っていたことを示していると感じざるを得ない。

今後この地域の調査によって、初期中山道と呼ばれる、この道筋の新たな一面が明らかにされていくことを期待したい。

末筆になりましたが、現場作業から報告書刊行までご協力を賜りました協力者の方々にお礼を申し上げます。

調 査 前 風 景

図版２

掘削状況

調査状況

調査地区全景

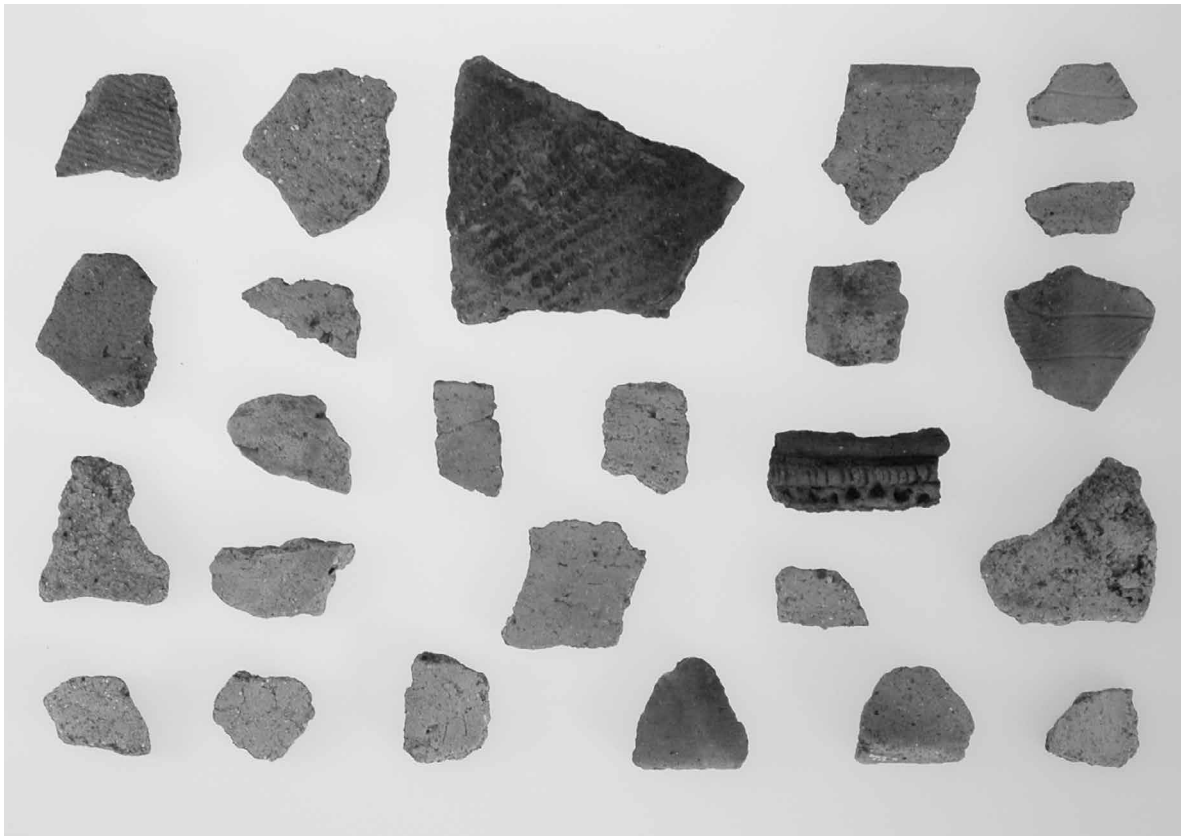
第１号トレンチ

第２号トレンチ

図版４

第３号トレンチ

第１号住居址



第 1 号住居址出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおぐりざわいせき
書名	大栗沢遺跡
副書名	砂防ダム用管理道路建設にともなう試掘調査報告書
著者名	福島　永
編集機関	辰野町教育委員会
所在地	〒399-0493　長野県上伊那郡辰野町中央1番地　　電話（0266）41-1681
発行年月日	平成22（2010）年３月23日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号	北緯	東経		
大栗沢遺跡（おおぐりざわいせき）	長野県上伊那郡辰野町大字小野4217番地	20382	13	35° 58′ 47″	138° 00′ 32″	20091207～20091208	約36㎡

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大栗沢遺跡	集落址	縄文時代	住居址　1 土坑　1	縄文時代早期土器 縄文時代中期・後期土器

特記事項	開発行為に先立つ範囲確認のための試掘調査を行った所、押型文を伴った住居址が検出された。このため、引き続いて破壊の懸念される地点について調査を行った。 その結果、被熱地点を伴った住居址を調査することができ、当該地に押型文期の集落の存在が想定できるようになった。 なお、縄文時代後期および中期の土器片も出土していることから、今後これらの時期も遺構も検出される可能性もある。

大栗沢遺跡

－砂防ダム用管理道路建設に先立つ試掘調査報告書－

発行日　平成22年３月23日発行

編集・発行　辰野町教育委員会
長野県上伊那郡辰野町中央１番地

印刷・製本　㈲精美堂印刷所
長野県上伊那郡辰野町辰野1685

大栗沢遺跡

2009
長野県辰野町教育委員会